

「漁師」ペトロ—史実か虚構か

前 川 裕

1 序

イエスの主要な弟子のひとりであるペトロの職業は、福音書の記述に基づいて「漁師」とであるとされる。この点はこれまでほとんど疑われることがなかった¹。しかし、それはどこまで歴史的事実であろうか。ペトロが歴史的に存在したことは間違いなからうが、その職業は「漁師」であったのだろうか。本小論では、「漁師ペトロ」という定説がどこまで歴史的な事実性を持ちうるかを検討し、このイメージに対する福音書記者マルコの貢献を考察する。

本研究では、まず現在まで伝えられているペトロについての記述を文献学的に検討する。それらを踏まえて、ペトロが漁師であるという記述の史実性を考察する。

ペトロの人物像に関する研究には資料の制約がある。パウロのように自分で書いた手紙が残っているわけではない²。また主な資料である福音書においても、ペトロは弟子の筆頭であるゆえに他の弟子たちに比べればはるかに記述は多いものの、人物像を描き出すためには十分とは言えない。これまでの研究においては、信仰告白や教会の基礎、また弟子たちの筆頭であるという立場に関して

1 たとえば標準的な事典でもペトロが漁師であったことは自明の記述となっている。Cf. Lampe, P. "Artk. Petrus." in: *RGG*⁴ VI, Tübingen: Mohr Siebeck, 2003, 1160ff.

2 本論ではペトロの手紙1、ペトロの手紙2がペトロ自身の執筆でないという立場をとる。

の考察がなされている³。近年では、福音書におけるペトロ描写についての文学批評の観点からの研究や⁴、1～2世紀における教会への影響の研究が盛んに行われている⁵。それらの中で、ペトロの職業と密接に関連すると考えられる、ペトロの召命の場面についての考察ももちろん行われている⁶。しかしそもそもペトロが「漁師」であることについて疑問を呈する指摘はない。本小論はこの点についての考察を行うことで、ペトロに関する描写への貢献を目指すものである。

3 ペトロの全体像を描いた主要な文献は以下の通り。Cullmann, O. *Petrus*. Zürich: Zwingli Verlag, 1960² (荒井献訳『ペテロ』新教出版社、1965年) ; Pesch, R. *Simon-Petrus*. Stuttgart: Anton Hiersemann, 1980; Brown, Raymond E., Donfried, Karl P., Reumann, John (eds.) *Peter in the New Testament*. Minneapolis, Minn.: Augsburg, 1973 (間垣洋助訳『新約聖書におけるペテロ』聖文社、1977年) ; Thiede, C. P. *Simon Peter: From Galilee to Rome*. Exeter: Paternoster, 1986; Perkins, P. *Peter: Apostle for the Whole Church*. South Carolina: Univ. of South Carolina, 1994; Grant, M. *Saint Peter: A Biography*. New York et al.: Scribner, 1994; Dschulnigg, P. *Petrus Im Neuen Testament*. Stuttgart: Katholisches Bibelwerk, 1996; Lampe, P. "Artk. Petrus." in: *RGG*⁴ VI, 1160. Tübingen: Mohr Siebeck, 2003; 小河陽『パウロとペテロ』講談社、2005年; Hengel, Martin. *Der Unterschätzte Petrus*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2006 (川島貞雄訳『ペトロ』教文館、2010年) ; Ehrman, Bart D. *Peter, Paul & Mary Magdalene: The Followers of Jesus in History and Legend*. New York, N.Y.: Oxford, 2006; 川島貞雄『ペトロ』(人と思想) 清水書院、2009年; Zwierlein, Otto. *Petrus in Rom: Die Literarischen Zeugnisse*. Berlin/New York: de Gruyter, 2010; Becker, Jürgen. *Simon Petrus Im Urchristentum*. Neukirchen-Vluyn: Neukirchener, 2011; Helyer, Larry R. *The Life and Witness of Peter*. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2012 ; Böttrich, Christfried. *Petrus: Fischer, Fels Und Funktionär*. Leipzig: Evangelische Verlagsanstalt, 2013.

4 例えば Wiarda, T. *Peter in the Gospels*. Tübingen: Mohr Siebeck 2000; Schultheiss, Tanja. *Das Petrusbild im Johannesevangelium*. Tübingen: Mohr Siebeck, 2012.

5 例えば以下。Gnilka, Joachim. *Petrus Und Rom: Das Petrusbild in Den Ersten Zwei Jahrhunderten*. Freiburg im Breisgau: Herder, 2002; Lapham, F. *Peter: The Myth, the Man and the Writings. A Study of Early Petrine Text and Tradition*. Sheffield: Sheffield UP, 2003; Bockmuehl, Markus. *Simon Peter in Scripture and Memory*. Grand Rapids, Mich.: Baker, 2012; Bond, Helen K & Hurtado, Larry W. (eds.) *Peter in Early Christianity*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2015. なお研究傾向のまとめとして Döring, L. "Schwerpunkte Und Tendenzen Der Neueren Petrusforschung." *Berliner Theologische Zeitschrift* 19 (2002), 203-23がある。

6 上記のほか、召命の場面に関しては Klein, G. "Der Berufung des Petrus." *ZNW* 58 (1967), 1-44が詳細な考察を行っている。

2 資料の検討

2.1 ペトロの職業についてのテキスト

ペトロが漁師であることを示すテキストには以下のようなものがある⁷。それらを順次検討する。

2.1.1 新約聖書正典

2.1.1.1 マルコ福音書の記事

16そしてガリラヤ湖のそばを通り過ぎている〔イエス〕は、湖に網を投じているシモンとシモンの兄弟アンデレを見た。なぜならかれらは漁師だったからである。17そしてイエスはかれらに言った。「わたしの後に従え、そしてわたしはあなたたちを人間たちの漁師となるようにするだろう。」18そしてすぐに網を放棄するとかれらは彼に従った。(1:16-18、私訳、〔 〕は訳者による補い)

マルコにおいて、シモンとアンデレの職業は「なぜならかれらは漁師だったからである」(ἦσαν γὰρ ἁλιεῖς) と明示されている。この記述を素直に受け取れば(そして素直に受け取る研究者がほとんどであるが)、シモン(=ペトロ)が漁師であることに疑う余地はない。

しかし、このテキストはどこまで史実を踏まえているかという検討が十分なされているとは言えない。マルコの記事は歴史的に正しいという暗黙の合意が存在しているのではないだろうか。マルコの記述は簡潔であり、また二人ずつ招くといった修辭も見られる⁸。これはこの物語記述が福音書記者の影響を大きく受けていることを示す。

7 以下の本文について、ギリシャ語原文はネストレ=アエラント第28版に基づいている。

8 Cf. Böttrich, 52.

2.1.1.2 マタイ福音書の記事

18さてガリラヤ湖のそばを歩いている〔イエス〕は、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとかれの兄弟アンデレが湖に網を投げているのを見た。なぜならかれらは漁師だったからである。19そしてかれらに言った。「わたしの後に従え、そしてわたしはあなたたちを人間たちの漁師にするだろう。」20それでかれらはすぐに網を放棄すると彼に従った。(4:18-20、私訳、〔〕は訳者による補い)

マタイは明らかにマルコの本文を利用している。文体を向上させるための若干の語の変更が行われているが、それでもマタ4:19とマコ1:17では原語において11語のほぼ全てが一致している。このことは、マタイがマコ1:17の部分を非常に重要なものと見なし、慎重に写したことを示している。目下問題となっている表現「なぜならかれらは漁師だったからである」も、マルコとまったく同じ表現のままで書き写されている。逆に言えば、(例えばルカのように)新たに追加された情報はないため、マタイはマルコの記している情報以外のものは知らないということになる。

2.1.1.3 ルカ福音書の記事

2そして〔イエスは〕二そうの舟が湖のそばに置かれているのを見た。しかし漁師たちはそれら〔舟〕から上がり、網を洗っていた。3さてイエスは、その舟のうちの一そうで、シモンの所有であるものになり、地から少し離れるようかれに頼んだ。そして〔舟に〕座った〔イエスは〕舟から群衆に教えていた。4さて話を終えたとき、シモンに対して〔イエスは〕言った。「深いところへ離れ、〔魚を〕捕まえるようにあなたたちの網をおろしなさい。」5そして答えてシモンは言った。「ご主人さま、夜通し苦労しましたが、わたしたちは何も得ていません。しかし、あなたの言葉をふまえて、わたしは網を降ろしましょう。」6そしてそれを行うと、魚の数多くを捕らえて、かれらの網は破れかけた。7そして別の舟にいる仲間たちに、かれらを助け

るために来るよう合図した。そしてかれらが来て、両方の舟を沈みそうになるほど一杯にした。⁸するとシモン・ペトロはイエスに〔向かって〕ひざまずき言った。「わたしから離れてください、わたしは罪ある男だからです、主よ。」⁹なぜなら、かれらが捕らえた魚の漁獲について、恐れがかれおよびかれと共にいた皆を捕らえたからである。¹⁰そして、シモンの仲間たちであった、ゼバダイの息子たちであるヤコブとヨハネも同じであった。そしてイエスはシモンに対して言った。「恐れるな。今からあなたは人間を生け捕りにする者となる。」¹¹そしてかれらは舟を地に運ぶと、全てを放棄してかれに従った。(5:2-11、私訳、〔 〕は訳者による補い)

ルカの記述によれば、マタイ並行のように「ペトロが漁師である」という直接の言及はないが、漁師たちの舟のうち、ペトロの持ち舟である一そうに乗った、という記述、またペトロが具体的に漁をしているという状況説明から、ペトロを漁師として描いていることは明らかである。

このルカの物語は、マルコ並行と共通の要素（網を洗っている、「人間をとる漁師」という言葉、全てを捨ててイエスに従う）を持ちつつ、奇跡物語の要素を加えて拡張しているのは明らかである⁹。であれば、この記述はマルコ並行の物語に別の歴史的事実を付け加えたものとは言えない。

「シモンの持ち舟」という表現は、マルコ並行の伝承とやや異なる。マルコ並行(1:16-18)では、かれらは「網」の手入れをし、そしてイエスに従うさいにはその網を捨てた。対して、ゼバダイの子らについては「舟」にも言及されており、イエスに従う時には舟をも捨てていつている。ルカはおそらくゼバダイの子らの記述に引っ張られ、イエスに従うための財産放棄を強調するために、この四人全てが「舟を捨てた」ことにしたのであろう。そのためにはペトロ（とアンデレ）も舟を持っていなければならない、「シモンの持ち舟」という表現が加わってきたと推測される。

9 Cf. 小河『パウロとペテロ』39頁。

共観福音書の三つの記述は、いずれもマルコが記した物語に基礎を置いている。その意味で、マルコを超えてはいない。マルコの伝えた内容（召命の場面、また「漁師であった」という紹介）が事実でなければ、共観福音書の記述はその支えを失うことになる。

2.1.1.4 ヨハネ福音書の記事

40シモン・ペトロの兄弟アンデレが、ヨハネのそばで聞いてかれ〔イエス〕に従った二人のうちのひとりであった。41かれはまず自分の兄弟シモンを見出し、かれに言った。「わたしたちはメシア（これは翻訳すれば油注がれた者）を見つけた」。42かれ〔アンデレ〕はかれ〔シモン〕をイエスのそばに連れて行った。イエスはかれを見つめて言った。「あなたヨハネの息子シモンである。あなたはケファ（これはペトロと解釈される）と呼ばれるだろう。」（1:40-42、私訳、〔 〕は訳者による補い）

ヨハネ福音書におけるペトロの召命の場面は共観福音書のそれと大きく異なっている。場所（湖のそば）、召命の言葉（「人間をとる漁師」がない）、また召命の順序（アンデレ→ペトロ）など、構成要素が大きく異なっている。目下の問題であるペトロの職業については、ヨハネにおける召命記事では記載がない。これは場面設定が異なっていることにも関係しているであろう。つまり、漁をしている場面でないために、漁師であるという紹介も必要がなくなっているのである。

ヨハネ福音書では、ペトロが漁師であることを示す場面がもう一箇所ある。それは21章におけるイエスの復活記事である。

3シモン・ペトロがかれらに言った。「わたしは漁に行く。」かれらはかれに言った。「わたしたちもあなたと一緒にいこう。」かれらは出て行き、舟に乗った。しかし、その夜には何もとれなかった。4さてすでに夜明けになり、イ

エスが岸に立っていた。だが弟子たちはイエスであるとは分からなかった。5さてイエスがかれらにいった。「子たちよ、なにか魚をもっているか。」かれらはかれに答えた。「なにも。」⁶すると〔イエスは〕かれらに言った。「舟の右側に網を投げよ。そうすればあなたたちは見出すだろう。」そこで網を投げると、魚があまりに多く、もはや網を引くことができなかった。(21:3-6、私訳、〔 〕は訳者による補い)

この記述によれば、ペトロがまず「漁に行く」と言い、他の弟子たちもそれに従う。ペトロが漁師を職業としていることは明確とは言い難いが、通常これは弟子たちが故郷に戻って従来の自分たちの仕事を再開したものと解釈されている¹⁰。

この物語の問題点は、そもそもこれが21章というヨハネ福音書の付加部分にあること、またルカ福音書5章の記事との類似である。この復活エピソードは他の福音書にある復活物語には見られないものであり、しかも後に付加されたということは、この伝承はヨハネ福音書の最初の形とは別個に存在していたものであることを示唆する。しかもそれがルカ福音書の記事と類似していることから、ルカ福音書の記事を取り入れ、編集したものという蓋然性は高い¹¹。すると、この記事もやはりマルコ福音書にまで遡ることになる。

2.1.2 出身地・居住地を示すテキスト

各福音書の記事の随所、また受難物語（たとえばペトロの否認の場面、マルコ14:70並行）において、ペトロはガリラヤ出身であることが知られる。なかでもヨハネ福音書では、ペトロの出身地あるいは居住地が明示されている。

「ところでフィリポはベトサイダ出身、アンデレとペトロの町の出身であっ

10 ルカと同様に、これらの物語の拡大には最初の弟子であるペトロの宣教的な働きが意図されているとみる研究者は多い（例えば Dschulingg, 133）。

11 ただし語彙レベルでの一致度合いは低い。

た。」(ヨハネ1:44、私訳)

「ベトサイダ」は現在エト・テル (Et-Tell) と同定されているが¹²、ガリラヤ湖沿岸の町であり、漁業が盛んな町であったとされる¹³。ベトサイダがペトロらの「出身地」であるのか、あるいは居住地であるのかはこのテキストからは明確ではないが、ペトロらの生涯において大きな位置を示していたことは間違いないであろう¹⁴。その住人の大多数は漁業に従事していたことは自然であり、ペトロらの一家も漁師であったと考えることは妥当であろう¹⁵。

共観福音書においては、「カファルナウム」がペトロの家がある場所として紹介されている。マルコ福音書1:29では「シモンとアンデレの家に行った」とあるが、これは1:20によれば「カファルナウム」に存在する。並行記事がマタイ福音書8:14 (「ペトロの家」) とルカ福音書4:38 (「シモンの家」) にあるが、それらではアンデレへの言及がない。カファルナウムはガリラヤ湖畔の町であり、ベトサイダと同様に漁業の町であったと考えられる。マーフィー＝オコナーは、ペトロらは税金等の理由でベトサイダからカファルナウムに移住したと推測し¹⁶、小河はペトロの結婚が移住の契機ではないかと推測する¹⁷。

12 Freyne, Sean. "The Fisherman from Bethsaida." in: Bond, Helen K. & Hurtado, Larry W. *Peter in Early Christianity*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2015, 19-29; Murphy-O'Connor, Jerome. "Fishers of Fish, Fishers of Men: What We Know From the First Disciples From Their Profession." *Bible Review* 15/3 (1999), 26.

13 cf. 小河『パウロとペテロ』28-9頁。

14 アーマンは最古の資料 (マコ1:21, 29) がカファルナウムにしか言及しないことを踏まえて、ペトロがベトサイダ (「魚の家」の意) 出身とされるのはペトロが漁師であることを反映したものにすぎないとする (Ehrman, 25)。つまりアーマンはペトロがベトサイダ出身であるという記述を疑っている。本小論の立場からすれば逆であり、むしろ「ベトサイダ出身」という伝承があったからこそ、ペトロが漁師であったとされたのではないかと考える。

15 小河は「…先祖代々父親譲りの職業を継承してゆく当時のパレスティナのユダヤ人一般家庭の事情から推察すると、家族はおそらくベトサイダに定住していた、漁業を生業として暮らしていた」と述べる (『パウロとペテロ』30頁)。グラントは「ペトロの父親は漁師だった」と述べるが、根拠は提示していない (Grant, 55)。

16 Murphy-O'Connor, 27.

17 小河『パウロとペテロ』32頁。ただし根拠は示されていない。

2.1.3 出身階層を示すテキスト

使徒言行録4:13は、ペトロとヨハネが ἄνθρωποι ἀγράμματοι εἰσιν καὶ ἰδιῶται 「無学な無知な人々である」(私訳) という。これが「漁師」であることの傍証になるかどうかは微妙である。「貧しい」ガリラヤの漁師というイメージは必ずしも正しくなく、漁業の状況からみて中産階級に属していた人たちもいたという説もある¹⁸。このような聖書テキストに見られる社会階層の情報からのみでは、ペトロらの職業を同定することは難しい。

2.2 新約外典資料

現存する聖書外文書にはペトロの名前を冠したものが多く見られるが、ペトロがイエスの弟子になる以前はどのようなであったか、という情報はほとんど含まれていない。たとえば『ペトロ福音書』(2世紀前半?)の場合、現存するのは受難物語のみであり、召命にまつわる記事等が無い(『ペトロ福音書』が召命記事等を含んでいたかどうかは不明である)。『ペトロ行伝』(2世紀後半?)にも漁師であるという言及はない¹⁹。ペトロが漁師であるということを明確にしている外典本文として、4世紀の作とされる『ペトロとパウロの行伝』23:1が挙げられる。ペトロは皇帝ネロの前で以下のように述べる。

23:1 Σίμων εἶπεν· Θαυμάζω ἀγαθὲ βασιλεῦ, τύχης τινός [σε] τοῦτον λογίσασθαι, ἄνθρωπον ἀπαίδευτον, ἀλιέα πτωχότατον, καὶ οὔτε ἐν λόγῳ οὔτε εἰς γένος μετέχοντα ἐξουσίας.

シモンは言った。「わたしは驚いています、善き皇帝よ、幸運にも[あなたが]

18 伝統的には「漁師の職業一般が貧しかった」(小河『パウロとペテロ』32頁)、「漁師は典型的な教育を受けない現業従事者で、若いときから水上で働き、老いるまで網を取る」(Ehrman, 25)とされるが、マーフィー＝オコナーは当時の海産物の取引を考察し、「資産のあるユダヤ教の中産階級」(a prosperous, assimilated Jewish middle-class family)であると主張する(Murphy-O'Connor, 48)。ハイラーは、漁業経済の重要性ゆえにガリラヤにおいて漁師は受け入れられていたが、好ましいものではなかったという(Heyler, 21-30)。

19 小河『パウロとペテロ』32頁には『ナザレ人福音書』断片10に「貧しい漁師」という表現があるとの記載があるが、『ナザレ人福音書』にはそのような表現はない。

この者のことを、無学な人間であり、とても貧しい漁師であって、言葉においても民族においても権威を持っていない者のことを考えてくださることに。」(私訳)

これは使徒言行録4:13におけるペトロとヨハネについての説明「無学の者たち」(ἄνθρωποι ἀγράμματοι)を想起させる(ただし用いられている単語は異なっている)。そこに「漁師」という表現が追記されている。しかしこの文書の成立自体が遅く、正典文書の記事を踏まえた追記であると考えるのが妥当であろう。よって、ペトロの職業を独立して伝えている資料と考えることはできない。

概して、外典はペトロの職業のような召命以前の情報を欠いている。これは「イエスの弟子」としてのペトロ像が重視されていたことを反映しているのであろう。そもそもイエスの場合についても、宣教開始以前の情報は必ずしも重視されていなかった。マルコ福音書やヨハネ福音書に降誕物語がないことはその反映である。

3 考察

3.1 ペトロが漁師であることを示すテキストについて

先に見たように、ペトロが漁師を職業としていたというテキストは全てがマルコ福音書の記述を基礎としていると言ってよい。すると、マルコ福音書の記述がどこまで事実を表しているかという点が重要となる。ここで問題となるのは、マルコ福音書は現存最古の福音書とされるために比較対象がなく、その記述が事実を反映しているかどうかを客観的に判断するのは困難なことである。そのため、マルコそのものの記述のみから事実性を検討することになり、一定の限界があることは否めない。

一般に、マルコ福音書の記事は史実性を踏まえていると考える研究者が多い。上記で検討した召命の記事についても、マルコの記事の事実性を疑う例はほと

んど見られない。しかしペトロの召命記事においては、マルコ福音書とヨハネ福音書でまったく状況が異なることはよく知られている。この二者については、どちらの記述が史実であるかを明言できないとする、あるいはあえて明言しない研究者がほとんどであるが²⁰、それらの場合であってもマルコの召命記事が史実を踏まえているという暗黙の前提によって記述がなされている場合が多い。その前提に基づき、ペトロの職業は漁師であるということも疑いなく受け入れられているようだ。

しかし、マルコの記事はそこまで信頼できるものであろうか。ヨハネ福音書のような別伝承がある以上、その信頼性も疑われねばならない。ただし、マルコの召命記事が史実でないと仮定する場合、マルコの記事がなぜ生み出されたかを説明できなければならない。ここでは、マルコ福音書に含まれている、「人間をとる漁師」というイエスの有名な言葉を踏まえて検討してみたい。

3.2 「人間をとる漁師」という言葉との関連

マルコ1:17「人間をとる漁師」(ἀλλεῖς ἀνθρώπων、直訳では「人間たちの漁師」)という表現はラビ文献等に類似例がなく、イエスに帰せられる言葉とみなされる²¹。ただし人間を魚に見立てて釣り上げるというモチーフは旧約的背景にも見られる。アモス4:2(「主なる神は、厳かに誓われる。見よ、お前たちにこのような日が来る。お前たちは肉鉤で引き上げられ／最後の者も釣鉤で引き上げられる。」)、ハバクク1:14-15(「あなたは人間を海の魚のように／治める者もない、

20 パーキンスは各福音書の記述が対立するゆえに、マルコの召命物語は単なる歴史的事実の素描ではなく、ペトロの役割や後代の教会の思想が含まれているとする(Perkins, 28)。また特に一般読者を対象とした書物では、各福音書の記述が全て史実であったというものもあるが(例えばこの違いを調和させる方法として、ヨハネ福音書の記事は、マルコ福音書に記載されていないマルコ以前の話であると見なす例(Thiede, 22)、ルカ福音書の記事はペトロが(マルコ福音書にあるように)弟子になってから後の話であると解釈する例(井上洋治『イエスに魅せられた男 ペトロの生涯』日本基督教団出版局、1996年)がある)、ここでは検討対象としない。

21 Cf. Davies, W. D. and Allison, Jr. Dale C. *The Gospel According to Saint Matthew: A Critical and Exegetical Commentary*. Vol.1, London et al.: T&T Clark, 1988, 398-9.

這うものようにされました。彼らはすべての人を鉤にかけて釣り上げ／網に入れて引き寄せ、投網を打って集める。こうして、彼らは喜び躍っています。』)、エゼキエル29:45 (わたしはお前の顎に鉤をかけ／うろこにナイル川の魚をつさせ／ナイル川の真ん中から引き上げる／お前のうろこについた川のすべての魚と共に。わたしはお前を荒れ野に捨てる／ナイル川のすべての魚と共に。お前は地面に倒れたままで／引き取る者も、葬る者もない。わたしは野の獣、空の鳥に／お前を食物として与える。)、エレミヤ16:16 (「見よ、わたしは多くの漁師を遣わして、彼らを釣り上げさせる、と主は言われる。その後、わたしは多くの狩人を遣わして、すべての山、すべての丘、岩の裂け目から、彼らを狩り出させる。」)が指摘されている²²。また死海文書の『感謝の詩編』5欄8行も指摘されている²³。「またあなたは水の上に網を投げる多くの漁夫たちや、邪悪の子らを狩る者たちの間にわたしの住居を設け、そこにわたしを裁きのためにおきたもうた²⁴。」これらの文脈には終末論的な背景が見受けられる²⁵。

これらの背景は考慮されつつも、「人間をとる漁師」という表現そのものの独自性はイエスのものであると考えられる。しかしルカ福音書は漁の場面というマルコ福音書と似た状況を受け継ぎつつ、この言葉を異なる形で記述している(マルコ=マタイ: ἀλιεῖς ἀνθρώπων、ルカ: ἀνθρώπους ζωγρῶν)。ここから、「人間をとる漁師」を意味する言葉は伝えられていたが、その表現には二つの伝承があったことが分かる²⁶。またヨハネ福音書では召命状況も異なり、またこの言葉も含まれない。ここから二つの可能性が考えられる。

(1) 表現に違いはあるにせよ、召命は漁にかかわる場面であるという点は共

22 Cf. Boring, M. Eugene. *Mark: A Commentary*. Louisville, Kenn.: Westminster John Knox, 2006, 59. ただし研究者によって、挙げている旧約参照箇所は異なる。

23 Smith, Charles W. F. "Fishers of Men: Footnotes on a Gospel Figure." *Harvard Theological Review* 52, no. 3 (1959), 190.

24 中沢洽樹・吉田泰訳、日本聖書学研究所『復刻 死海文書』山本書店、1963年、175頁。

25 それゆえ、例えばスミスのように(Smith, 194)、マルコは「人間をとる漁師」という言葉を加えることによって弟子召命の場面に終末的な意味を導入した、と考える研究者は多い。

26 あるいは、ルカはマルコにある「人間たちの漁師」という表現を知りつつ、より洗練した表現「人間たちをとる者」に修正したかもしれない。

観福音書において共通している。よって、ペトロが漁にかかわる職業であったことは事実と見なしてよい。

- (2) ヨハネ福音書にこの言葉がないことは、ガリラヤ湖での召命という記事を含まないことも踏まえると、福音書記者ヨハネはこの言葉を知らなかった可能性が高い。またヨハネ福音書にはペトロが漁師であるという明確な記述はない²⁷。よって、ペトロが漁師であるということは必ずしも主張できない。

一般には(1)の可能性が(暗黙のうちに)信じられているといえよう。しかし(2)の可能性はないだろうか。これはマルコ福音書の召命記事は史実ではないと考えることを意味する。イエスの誕生物語はマタイ・ルカによって付加されたものであることは疑いの余地がないが²⁸、それは公生涯以前のイエスの人生については関心がなく、情報もなかったからであった。ペトロについても同じで、召命より前の人生についての情報は福音書に記載されていない。これもまた、召命以後が重要であり、それ以前については関心がなかったからであろう。その点でも、イエスについての描写とペトロについての描写との並行性を見ることができる。

3.3 なぜペトロは「漁師」でなくてはならないのか

上記でみたように、「人間をとる漁師」という言葉はイエスの特徴的な言葉のひとつとされる。この言葉には「漁師」が含まれるため、この言葉をかけられる対象(招かれる者)は漁師でなければならない。かつ、「わたしに従いなさい」という招きの言葉と共に伝えられていたとすれば、それは召命の場面となる。これがペトロの召命場面にあてはまられたとき、ペトロの職業は「漁師」でなければならないことになる。マルコは「人間をとる漁師」という言葉伝承のみ

27 ここでは21章の記述はヨハネ福音書(の初版?)に対する二次的追加であるとの立場をとる。

28 それらの物語がマタイやルカの創作なのか、あるいはそれらの核となる伝承をマタイやルカが受け取り、独自に脚色したものであるのかははっきりしない。

を受け取り、それに適したペトロの召命場面を創りだしたのである²⁹。

また、『ペトロとパウロの行伝』からは、古代において「漁師」には「無学」、「貧しい」というイメージが伴っていたことが伺える³⁰。イエスの弟子たちは「無学」であるというイメージ（使徒4:13参照）があったため、それに適合したことも、弟子たちの筆頭であるペトロを（貧しい）「漁師」として描くことの動機となったであろう³¹。

さらに、ペトロの家がカファルナウムにあることが述べられているが（マコ1:21他）、前述のようにカファルナウムは漁業の町であった可能性が高い。そこに住むペトロもやはり漁業関係者として描かれるのは無理がない³²。

以上から、マルコ福音書における弟子の召命記事は、歴史的事実を記したものではない可能性は排除できないものであるといえよう。

29 ひとつの反論として、マコ2:13-14におけるレビの召命物語との類似が考えられる。すなわち、ペトロらの召命物語と基本的な筋は同じなのに、レビの召命物語においては「人間をとる漁師」という言葉は含まれていない。これはマルコが基本的な筋を両者に用い、ペトロらについては（かれらが漁師だったので）「人間をとる漁師」という（伝承された）表現を付け加えたのだ、となる。しかし、これに対しても反論が可能である。つまり、「人間をとる漁師」という表現からペトロらの召命物語が創作され、レビについてもその物語の筋が利用されたのだ、となる。なおマコ1:16-20の背景として列王記上19:19-21におけるエリヤを通じたエリシャの召命記事を挙げる研究者もあるが（cf. Pesch, 16; Perkins, 28）、その立場をとるならば、マルコの召命物語もマルコ自身が創りだした可能性が高い証拠となるであろう（もっとも、本論はその立場とはならない）。

30 新約正典文書には、漁師は貧しいというイメージは特に示されていない。マルコ1:19-20ではゼベダイの父が人を雇い、舟を所有していることが述べられ、またルカ5:3ではシモンが舟を持っていたことが述べられている。小河はペトロの親族が「小さな生産共同体を作り上げていた」と推測し、そのゆえにペトロがイエスに従って家を出ていっても一家は経済的に困窮しなかったと考える（小河『パウロとペテロ』36頁）。

31 アーマンは人々がペトロを貧しい現業従事者と考えたがった理由について、最初の二世紀間のキリスト者たちの多くもまた貧しい階層出身であったからと推測する（Ehrman, 27）。

32 スミスは、カファルナウムで漁師が一般的な職業でないとしたら、四人の職業は召命との関係で挙げられたと考えたくなるかもしれないが、そんな仮定は不要である（Smith, 194）、と述べているが、本論では一般的な職業であるからこそペトロらの職業として漁師が当てはめられたと考える。

4 まとめ

ペトロの職業としての「漁師」はその全てがマルコ福音書におけるペトロの召命記事を根拠としているが、その記事自体の史実性は当然のものではなく、問い直されるべきものである。イエスの「人間をとる漁師」という言葉のインパクトのゆえに、それに適合した召命物語をマルコが創作した可能性がある。そして、もしこれがマルコの創作になるものであるとすれば、「ガリラヤの貧しい漁師」がイエスの弟子となったという、弟子たちのイメージにたいするマルコの貢献はたいへんに大きなものであるといえよう。